
ぼやき 短篇集

森村 杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼやき 短篇集

【Nコード】

N8733T

【作者名】

森村 杏

【あらすじ】

みんなぼやきたいよね。

学校も会社も面白い物に行っちゃって。

様々なシチュエーションでのぼやきを一話完結でお届けします。

以前、短編で投稿させて頂きましたが、短篇集として作り直しました。
dNovels様にも投稿させて頂いています。

あるバスの運転手（前書き）

今回はバスの運転手さんになってみました。

あるバスの運転手

『次は街道四つ角、街道四つ角です』

車内アナウンスが流れる。

ピンポンとボタンが押される。

「はい、次止まります」

俺はマイクに向かって喋る。

大きな交差点に近づいて右折レーンに入る。

カチツカチツとウインカーの音が響く。

信号機が右折表示になる。

「左よし、下よし、右よし、発車します」

指差し確認をして走り始める。

慎重に右折をしてから三百メートル程先にバス停がある。

左ウインカーを出して左ミラーを確認する。

安全を確かめてからハンドルを軽く左に切る。

バス停の前で上手く止めてドアを開ける。

「ありがとうございます」

料金箱の横を通る客に向かって礼を言う。

「ありがとうございます」

一人ひとりに声を掛ける。

「ありがとうございます」

かったりいな、さっさと降りてくれ。

「あ、申し訳ありません、料金が不足しているようです」

料金箱がエラーを表示している。

「なんでだよ、カードの残高あるだろう」

「申し訳ありません、不足しているようです」

「ふざけるな、もう一度通すぞ」

制止する暇も無く、客が読み取り機にカードをかざす。

当然残高は0円になっている。

「なんでだよ、昨日チャージしたばかりなのに」

「そう言われましても」

「あなた、それ私のじゃない？」

「えっ？」

「これがあなたなのでしょう」

奥さんらしき人が別のカードを手渡す。

そのカードをかざすとエラーは表示されなかった。

「これでいいんだろ」

そう言っつて客は降りていった。

「ありがとうございます」

ふざけんなよ、てめーで間違えたくせに。

「すみません」

奥さんらしき人が頭を下げて降りる。

「ありがとうございます」

旦那らしき客はこっちを見ながら何か言っつて歩きだす。

奥さんらしき人と眼が合うと、頭を下げられた。

「つたく、あれじゃ奥さん大変だろうな。」

バス停で待っていた客が乗車し終えるのを待つ。

「ドア閉めます」

俺はボタンを押してドアを閉める。

「左良し、下良し、右良し、発車します、お掴まり下さい」

安全確認をして発車させる。

ゆっくりと亀が歩くみたいに、ローからセコンドに、セコンドが

らサイドにギアを変える。

ボタンを押してアナウンスを流す。

『次は国道上、国道上でございます』

ピンポンとボタンが押される。

「はい、次止まります」

マイクに向っつてしゃべる。

なんだかなあ、今日はやけにかっつたるい。

大体、さっきの客もふざけてるよな、自分で間違えてて逆切れかよ。

まったく自分勝手な奴ばっかりだ。

今日は車庫を出るときから気分が悪かったんだ、小林（運行管理者）が俺の配車と立花の配車を間違いやがるから、馴れない車両で点検に時間を食った拳句に、むちゃくちゃ慌てて出庫したからコーヒー飲むのも忘れちゃった。

駅に着いたら待機時間にコーヒー飲むぞ。

「停車します、お掴まりください」

またこの渋滞かよ、少しは考えて道路作れっていうんだよ、毎日こんな混んでるんだから、改善とか考えないのかよ。

必ずと言っていい程、毎日渋滞する交差点。

ここでどれだけのタイムロスを食らうか、また文句言われるんだろつな、時刻表通りに走れないのは俺のせいじゃない。

案の定とるとる進んで、五分遅れの到着になる。

「ありがとうございます」

年寄り降りに降りに時間を食う。

婆さんが降りると、あんちゃんとオヤジが乗って来た。

俺を睨みつけながらオヤジは奥に進んだ。

ふざけんなよ、俺を睨んだって早く走れる訳じゃないんだよ。くそつって思いながら安全確認をする。

「発車します、お掴まり下さい」

一般車に邪魔されることもなく走り始める。

『次は国道下、国道下でございます、流行に敏感なヘアサロン、マミ美容室はこちらでお降りください』

ここでは降りる客がないようだ。

バス停が近づくと人が立っているのが見えた。

「止まります」

安全確認をしてバス停で止める。

お兄ちゃんが乗ってくる。

「あ、後払いなので、チケットをお取りください」

「え？」

「そちらのチケットをお取りになって、降車時に料金といっしょに出してください」

「ああ、先払いじゃないんだ」

「はい」

「変わったの？ この前乗った時は先払いだったのに」

「いいえ、以前から後払いです」

「そうなんだ」

「いるんだよな、こういう奴、思い込みで言っただけで来やがって。」

朝と夕方だけが先払いだったの、ちゃんと時刻表のところに書いてあるってんだよ。

「左良し、下良し、右良し、発車しまゝす、お掴まり下さい」

やっぱり今日はだめだ、普段だったらこんな奴にいちいち腹立たないんだけどな。

とにかく事故だけ起こさない様に気をつけよう。

『次は警察署前、警察署前です』

ピンポーン。

「次、止まりまゝす」

ここが面倒なんだよ、止めるのはまだいいけど、発車する時が危ないんだよな。

交通量が多いし、信号は近いし、なんだってこんな所にバス停立ってたんだ。

嫌でも止まらなさいといけない。

安全確認をしてバス停に止める。

扉を開けると客が運賃を払って降りる。

「ありがとうございます」

三人が降車して二人が乗車して来た。

「左良し、下良し、右良し、発車しまゝす、お掴まりください」

いきなり飛び込んでくる車両に注意しながら走らせようとした時。

「すみません、降ります！」

中年の夫婦らしい客が、慌てて後部座席から立ち上がる。

「危険です、立たないでください」

マイクに向って言いながら、ブレーキを踏みしめる。

バスは一メートル位動いていた。

「すみません」

料金箱のところで女性が頭を下げる。

俺は怒りを抑えながら扉を開ける。

「なんだよ」

男の方が俺に向って言ってきた。

「危険ですので、今後はご注意ください」

「客に向ってなんだ」

「お客様の安全を守るのも私の仕事です」

「余計なお世話だ」

他の乗客が冷たい視線を送っている。

夫婦らしい客は、あわてて料金を払って降車した。

改めて安全を確認してからバスを発車させる。

まじふざけんなよ、こんなの通報されたら俺が被害を受けるだろうが。

路線バスはバス停でしか客を乗降させれない。

俺たち運転手は、法令に縛られた中で乗務している、道交法はもちろんバス特有の法令も守らなければならない。

だからって下手に客を注意すれば、すぐにクレームだ。

法令を違反しても、客からクレームを言われても、どっちにしたら俺たちにはお座敷が待ってる、注意されるだけならまだいい方だ、下手すれば乗務停止だの運転者登録解除だの、厳しいお裁きが待っている。

ちえっ、俺たちは奴隷かよ、何されても「はい、そうですか」って言っただけならいいのかよ。

ああくそ、やっぱ今日は早退しよう、昼休みに会社戻ったら帰る

ぞ。

さつさと帰って酒でも飲まなきゃやってらんねえ。

大体これだけ腹立って、事故でも起こしたらどうすんだよ！

そう、事故が一番怖い、職を無くすレベルじゃない、一步間違えば一生を棒に振ることになる。

その後も俺は「左良し、下良し、右良し、発車しまゝす、お掴まり下さい」

と「ありがとうございます」を繰り返した。

安全確認をきっちりやって、事故だけは起こさずに会社に戻った。

「お疲れ様です」

事務所の奴がへらへら挨拶をしてきた。

「今日は帰る、このままじゃ事故を起こしちゃまう」

俺は点呼場のカウンターに日報を叩きつけて事務所を出た。

「どうしたんですか、困ります」

事務員が後を追って来るのを無視して、洗車を始める。

事務所の奴がどう思おうと構わないけど、運転手仲間から文句は言われたくない。

車両の整備だけはやっておかないと何を言われるか判らない。

「今日はどうしたんですか？」

ベテランの運行管理者が俺のところに来た。

「元々はお前から事務所が悪いんだろ、朝っぱらから車両を間違いやがって、出庫前から気分悪いんだよ」

「申し訳ありませんでした、報告は受けてます」

「運転手を気分良く仕事させるのがあんたらの仕事じゃないのかよ」

「その通りです」

「だったら、きっちり仕事をしろよ」

「判りました」

「とにかく、今日は帰る、事故りたくない」

「そうですね、無理は言いません。気分転換して、明日また乗務してください」

彼はそれ以上何も言わずに事務所に戻って行く。

大人気ないのは判っている心算だ、でも今日は帰って一杯飲む。とても仕事してられる気分じゃない。

ベテランの彼には嫌な思いさせたかも知れないな。

俺はそう感じたけど、自家用車に乗って会社を出た。

あるコンビニ店員

またあの夫婦が来た。

いつも一緒に来る。

こっちは仕事してるっていうのに。

なにイチヤイチャしてるんだか。

買うもん買ってさっさと出てけ。

まず、アイスを見るでしょ。

次に冷食コーナー寄ってからお酒見て。

ほら、パン見てる。

いつも買ってって飽きないのかしら。

お弁当は見たって買わないでしょ。

今日はデザート買うの？

どうせ温め物買うんでしょ。

さあ、かご持ってきたわよ。

「いらっしやませ」

目いっぱい営業スマイル。

「ポイントカードはございますか」

持ってるの知ってるけどね、決まりだから聞く。

ピッ、ピッ、ピッ、ピッっと。

バーコード読ませて袋に入れる。

「17番と50番のタバコください」

そらきた。

「こちらでよろしいですか」

一応確認してバーコードを読ます。

「それと、アメリカンドック2つください」

ほらやっぱりね。

「かしこまりました、温めてよろしいですか」

「お願いします」

電子レンジに入れて。

「先にお会計よろしいですか」

「あ、はい」

「1520円になります」

女のほうで金を出す。

「細かいのある？出そうか」

「大丈夫、あるから」

どっちでもいいからさっさと払ってよ。

先にアメリカンドッグ取って来たほうがいいわね。

「こちらご一緒にお入れしてよろしいですか」

「温かいのはこっちにもらう？」

「いいわよ」

「ごちゃごちゃ言っていないでさっさとしなさいよ。」

「どうぞさねますか！」

やば、強い言い方しちゃった。

「なんだよその言い方、あんたムカツクな」

「やめなさいよ」

女がとめてるけど旦那は怒ったみたい。

ちよつとやばいかな。

「何かお気に障りましたか」

「ふざけんなよ、今の言い方はなんだよ」

「申し訳ありません」

「それに、なに睨みつけてんだよ」

「そんなことありません」

やっぱりやばったかも知れない。

「やめなさいよ」

「こんな奴に馬鹿にされる覚えないんだよ」

こんな奴ってなによ。

「馬鹿になんてしていません」

「ふざけるな、店長呼べ、店長」

あゝあ、完全に怒っちゃった。
めんどくさい。

この夫婦しょっちゅう来てるからまずかったかな。

「なにかございましたか」

「やば、店長来ちゃった。」

「この人、ムカツクんですけど」

「何か失礼を致しましたか」

「言い方きついし、睨まれるし、俺は客だよ」

「出た、必殺の自分は客攻撃。」

「私、そんなことしていません」

「冗談じゃないわよ、客だからってなんなのよ。」

「従業員が失礼をしたのなら、私が謝罪いたします」

「店長、頭下げちゃった。」

「なんでよ、私が悪いみたいじゃない。」

「いや、お宅にのせいじゃない、あの店員の態度が気に入らないんだよ」

「判っています、私が責任を持って理解させます」

「お宅がそう言うならしょうがない」

「ありがとうございます」

「店長つたら、また頭下げてる。」

「もういいでしょ、買いに来づらくなっちゃっしょ」

「判ったよ」

「私を睨みながら店を出て行く。」

「こっちこそムカツクわよ。」

「またのご来店をお待ちしています」

「店長は深々と頭下げてるし、怒られるのかな、でも私が悪い訳じゃない。」

「塩田さん来て」

「やっぱりね。」

「はい」

店長に促されてバックヤードに入る。

「私、失礼なことはしていません」

先制攻撃だ。

「そうですか、では何故お客様が怒ったのでしょうか
えらい冷静ね店長。」

「判りません、虫の居所が悪かったんじゃないですか」

「塩田さんはずいぶん怖い顔をしてましたね」

「あのお客様が急に怒り始めたからです」

「いいえ、レジを打つてるときらでした」

え、ずっと見てたの。

「それは、レジのところでもたまたしたから・・・」

「塩田さん」

「おわ、店長まじ顔してる。」

「はい」

「お客様に対する態度ではありません、貴方は前にもお客様を怒ら
せていますね」

「それは」

「お客様が悪いのですか」

「いえ」

さすがにやばいわね。

店長の顔、怖くて見れない。

「私たちは店員です、お客様と対等ではないんです」

「はい」

「前にも同じ事を言ったと思います」

「はい」

「理解してもらえますか」

「はい」

「ここは素直に返事するしかないでしょ。」

「反省してください」

そう言って店長は店に戻って行く。

なんでよ、私のどこが悪いっていつもの。
お客が勝手なだけじゃない。

店長だって、私のいうこと何も聞いてくれないで、「冗談じゃないわ。」

ああ、腹が立つ。

「塩田さん、大丈夫？」

「あ、川村さん」

「店長に怒られたの？」

「そうよ、私の話を聞きもしないで」

「あのお客様、どうして急に怒ってたの？」

「レジの前でもたもたしてたから、ついきつい言い方しちゃったのよ」

「それは、失敗だったわね」

何？この女も客の見方？

「私もたまにあるわ、スーパーで買い物した時とか、お会計してるのに旦那が後から商品持って来たりとか、塩田さんはそういうの無い？」

「たまにはあるけど、タイミングだからしょうがないわよね」

「同じ事じゃない」

「何が？」

「さっきのお客様」

「違うわよ、あんなの一緒にしないでよ」

「そうかなあ、同じだと思っけど」

「川村さんもあっちの味方なんだ」

「味方とかじゃなくて、仕事って割り切ってるだけ」

「大人ね」

「お給料もらってるし、お客様とは立場が違うもの」

「客だからってええられる必要無いと思っ」

「そうかな……、そろそろ行くわ、店長に怒られちゃう」

そう言っって川村さんは店に戻った。

なによ、みんなして、本当に今日は頭に来る。

冗談じゃないわよ。

「塩田さん、今日はもういいですよ、帰ってよく考えてみてください
い」

店長に言われて私は店を出た。

ほんつとに腹立つわ。

夕飯の買い物でもしましょ。

近所のスーパーに寄って買い物をした。

レジに並んで会計の順番を待つ。

やっと順番が来た。

「お会計は1250円になります」
何？

「ちよつと高いんじゃない」

コンビニの店員なめないですよ、計算したんだから。

「お待ちください」

店員がレシートを出して金額を調べる。

「お間違いありません」

「なんでよ、これとこれが半額でしょ！」

「申し訳ございません、こちらは3割引になります」

「何いつてるの、半額のシールが・・・」

貼ってない、確かに3割引きだわ。

「私の見間違いね、でも、客に恥かかすことないじゃない」

「申し訳ございません」

「店長を呼べ」って言いけど、言えない。

自分で見間違えたんだから。

あああ、今日は何もかも駄目な日ね。

これじゃ私も嫌な客じゃない。

今日はさつさと家に帰りましょ。

これ以上嫌な思いしたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8733t/>

ばやし 短篇集

2011年6月7日15時40分発行